

49 幕末期の院内銀山「お抱え医」の実態

—「門屋養安日記」にみる庶民の医療(一)—

蒔 昭 三

「門屋養安日記」

門屋養安は、寛政四年(一七九二)新庄藩で生れ、明治六年(一八七三)八十二歳で没している。人生の大部分を秋田佐竹藩直営の院内銀山のお抱え医師として銀山町に居住した。その間、天保六年(一八三五)から明治二年(一八六九)の三十五年間ほとんど毎日、日記を書き遺している。現在、天保八年、文久三年、慶応三年が行方不明であるが、残り三十二年分が秋田県公文書館に所蔵されている。全文二千四百十九丁の膨大な記録である。

養安は、銀山の手代・お抱え医師として鉱山労働者の健康管理に当たりながら、鉱山の経営管理にも参画し、認可をえて旅館も経営し、更に町医者として周辺村民への医療にも従事した。日記は、一人の医師の私的な日記

ではあるが、鉱山経営と労務管理の実態、当時の「町医者」の様態、庶民の医療の様子などを断片的ではあるが今に伝え、貴重な資料である。同時に養安自身の文化的素養から、江戸・京・大阪から遠く離れた東北地方での当時の庶民の生活・習慣や文化もきわめてヴィヴィッドに伝えている。

この日記は、その全文が『近世庶民生活史料、未刊日記集成』(三二書房)の「門屋養安日記・上下」として翻刻・刊行が進められている(上巻は昨年十一月出版)。今回はこの日記により、幕末期の鉱山「お抱え医」の業務の実態について分析・報告する。

院内銀山町の概略

院内銀山(現秋田県雄勝郡雄勝町)は慶長十一年(一六〇六)に鉱脈が発見されて採掘が開始されている。享保年間までは佐竹藩の直山であったが、その後衰退し民間の請山となった。しかし文化十四年(一八一七)、藩政改革で再び佐竹藩の直営となり、銀の生産が増加し、天保四年(一八三三)には年生産高は約千百七十八貫となり、その後約十年間は「天保の盛山」と繁栄をうたわれた。

天保七年（一八三六）の町の人口は約二百二十軒、三千九十九人であった。内わけは、支配人・手代など役人とその家族約百八十四人、金名古など現場責任者四十五人、金掘大工、掘子、水替えなど鉱山労働者千三百六十九人、その他である。さまざまな身分・職能の人々が密集し、銀の生産という目的のためにのみ機能していた鉱業生産都市、それが銀山町であった。

「お抱え医」の実態

・ 銀山には詰合、支配人をはじめとした役人及び金名子等の労務管理者が約二百三十名存在するが、それらの人々への灸治、漢方治療がその業務の重要な一つであった。

・ 鉱山労働者の健康管理——このため鉱山内の労働条件の視察と問題点の把握、同時にしばしば流行した風邪、痢病、コレラ等の治療、このための薬種の購入計画の作成、薬代の書き上げ等も日常の重要な業務であった。施薬は予算の制約と薬種不足のために滞り、投薬する患者の選別さえ不可避であった。

・ さらに日常的に発生する喧嘩、自然・労務災害への対

応も必要であった。

・ 「山中病用」以外に町医者として求めに応じている。その特長の一つは往診先でしばしば近郷の医師と対診していること、また依頼を受けて往診した際、多くの場合他の医師が居合わせていることである。更に、医師同志の「談葉」がしばしば記載されている。

・ 弘化元年（一八四四）の植痘瘡の実施や白鳥雄蔵の銀山町への来町の記載は、東北地方での種痘の経緯を明らかにする材料でもあり、興味ある知見である。

近世末期における、藩直営の鉱山町という限定された地域ではあるが、庶民の医療の実際と医師の活動の実相がうかがえる。

（城北病院）